

## 第3章 フランス革命と産業革命：18世紀から19世紀へ

18世紀中頃にツーリズムが「誕生」した。あるいは、ボアイエにならって、すでに始まっていた観光旅行が「維新」ないし革命的発展期を迎えたといってもいい。とはいえ、上に見てきたように、ツーリズムといっても、最初期には、イギリスをはじめとする貴族階級とごく一部の富裕なブルジョア階級のみがこれを享受しえたにすぎなかった。18世紀の後半以降観光旅行は順調に発展していくが、18世紀最後の10年と19世紀の最初の15年の四半世紀ほどの間は、フランス革命の勃発とこれに続くナポレオン戦争によってヨーロッパの国際観光は中断に近い状態になってしまう。

他方、この時期にイギリスでは産業革命が急速に進展する。ツーリズムという概念も言葉もこの四半世紀の間にはっきりと姿を現し、観光行動は前にも増して活発化する。そして、1830年に旅客鉄道が登場して近代ツーリズム時代に突入する。ヨーロッパの近代化を仕上げたのは18世紀末から19世紀前半にかけてのフランス革命とイギリスにおける産業革命であり、この時代を経ることによってツーリズムは飛躍するのである。まず、フランス革命からみてみよう。

### 1. フランス革命とナポレオン

啓蒙主義を通じて、フランスの思想界は宗教的権威を否定し、現状の政治・社会の不合理を抉り出し、身分制度を否定する思想によって旧制度の社会を大きく揺るがした。1748年にスイスで出版されたモンテスキューの「法の精神」は、三権分立の思想によって絶対王制を否定し、ルソーは「エミール」(1760)の中ですでに革命の時期が迫っていると予言した。破綻に瀕した王政の財政を救うため、最後の手段として、1789年5月、忘れ去られていた全国三部会がヴェルサイユに召集された。ここから始まる政治の激動は、世界史を変えた最大の事件と言われるにふさわしく、根源的な課題をめぐる試行錯誤の中で、立憲王政への転換に失敗し、支配階級たる貴族・高位聖職者階級を打倒するにとどまらず、王政そのものを否定する大革命へと突きすすんでいく。

### 行き詰る旧体制

革命前のフランスの政治と社会の仕組みは一般に旧体制(アンシャン・レジーム)と呼ばれ、政治的には絶対王権が支配し、社会的には身分制と領主制が存続していた。身分制とは、第一身分の聖職者、第二身分の貴族、第三身分の平民(前二者以外の者)、という三つの身分に区分された社会である。革命直前のフランスの人口はヨーロッパ最多の約2600万人で、内訳は、第一身分の聖職者が約14万人、第二身分の貴族階級が女性と子供を含めておよそ40万人であった。第三身分は、都市の商工業や金融業に従事する者の中から生まれてきたブルジョアと称せられる裕福な階層が約100万人、非農労働者が約200万人、残りの2,300万人弱(全体の86%)が自作農、小作農、分益小作農、農奴などからなる農民であった。

高級聖職者と貴族は、免税をはじめとする様々な特権を有していた。とくに彼らは領主として領民に対する絶対的支配権をもっていた。たとえば地代の徴収のほか、賦役を課す権利、水車、パン焼かまど、ブドウ酒製造の圧搾機の独占権をもち、さらに勝手に判決を下せる領主裁判権をも有していた。農民は汗水たらしてつくる作物を地代として納めるだけでなく、それを粉にするために水車を、パンを焼くためにパン焼がまを、ブドウ酒を作るために圧搾機を、すべて領主の施設に依存し、高い使用料を払わなければならなかった。そして、貴族の多くは領地での仕事は代理人に任せ、自分たちは不在地主としてヴェルサイユの宮廷で生活していた。

こうした古い体制は啓蒙思想によって不合理さを厳しく糾弾され、貴族階級の間にも自由主義的思想が浸透していった。18世紀の後半には、七年戦争（1756~63）とアメリカ独立戦争（1778~83）のための戦費や宮廷の濫費で、政府の財政は危機的状態に陥っていた。もともと、政府の財政は破たん寸前であったが、この時期のフランス経済は急成長していた。例えば、外国貿易は、1710年代の輸出入合計2億リーブルから、50年代には6億リーブル、80年代には10億リーブルへと急激に増えている。18世紀初頭に1900万人ほどであった人口も2600万人にまで増加し、4万キロにおよぶ国道の整備が行われたのもこの時期であった。経済成長を支えたのはブルジョアとよばれる都市の手工業者や富農層であった。彼らは王政の恩恵を受けて成長してきたが、生活態度や考え方において、すでに伝統的な価値観にとらわれてはいなかった。彼らの成長が、貴族の免税特権などの不公平税制の改革をうながし、イギリスとの経済競争に後れを取る原因である様々な生産活動の統制の撤廃へと向かわせた。

フランス革命にいたる前に、政府による上からの財政改革が幾度も試みられたが、すべて特権階級の反発によって挫折し、その成り行きが第三身分の間に鬱積していた不満を暴発させることになる。

**構造改革の挫折** 当時の政府の年間収入は約5億リーブルほどだったが、アメリカ独立戦争に参戦して投入した経費は20億リーブルにもおよび、積もり積もった赤字は1789年には45億リーブルにも達していた。チュルゴー（1727~81）、ネッケル（1731~1804）、カロヌ（1784~1802）と続く宮廷の財務総監が行なおうとした財政改革は、特権階級の強硬な反対のために、ルイ16世（在位1774~92）に改革の意図はあったものの、王自身の弱気と優柔不断から改革の推進者を次々に解任し、すべてが失敗に終わる。

ルイ16世は、1774年に即位したとき、財政改革の必要性を認め、百科全書派の一人で重農主義者ケネーの親友でもあったチュルゴーを財務総監に指名した。彼は資本主義的自由を妨げている封建的諸統制や特権、とくに農民の賦役労働、穀物取引の統制、商人や生産者のギルドの廃止を勅命によって断行に踏み切ったが、旧制度の恩恵を受けていた貴族と、御用商人やギルドの親方ら既得権者たちの猛反発にあい、王の腰砕けによって解職され、改革は頓挫した。あとを継いだ銀行家のネッケル（1732~1804）は、アメリカ独立戦争の莫大な戦費を調達するのが精いっぱいだったが、国家財政の巨大赤字（5億3,200万里

ーブル)の内容を「財政報告書」によって公表して世の注目を浴びた。絶対王政のもとで国家財政の秘密を人民に暴露したのは史上空前のことだったからである。ネッケルもチュルゴー同様、財政危機を乗り切るには抜本的な改革が必要であることを認識したが、やはり特権階級の反発にあって辞職せざるをえなかった。(「フランス革命とナポレオン」(中公「世界の歴史⑩」) p74～

1783年にネッケルの後を受けたカロンヌは、財政再建は旧体制のまま増税しても改善の余地はないと考え、非常手段として聖職者や貴族にも公平に課税する構造改革を訴えた。当然特権身分の反対は激しく、カロンヌは王の提案を支えるはずの王の諮問機関「名士会」(王族、貴族、地方の名士などで構成)を召集して、反動勢力の牙城高等法院を抑えようとした。しかし、名士会は特権侵害を直接攻撃はせずに、カロンヌの財政政策に難癖をつけて議決を引き延ばし、最終的に王は今度もカロンヌを解任して、上からの改革を最終的に挫折させてしまう。1789年4月のことであった。残された手段は、1614年以来開かれたことのなかった議会(全国三部会)の開催であり、急きょ5月にヴェルサイユに召集されたのであった。

**革命の勃発** 1789年5月4日、翌日から開かれる三部会のために、三身分を代表する1200人(第一、第二身分が各300人、第三身分が600人)がヴェルサイユに集まった。国王、王妃、全宮廷、三部会の代表たち全員がノートルダム寺院でミサをあげ、市内を行進した。新しい時代が動き出そうとするその光景に、改革反対派の貴族でさえ感動を抑えられなかったという。しかし、会議は審議の進め方をめぐってはじめてから紛糾した。身分別に審議しようとする特権階級の意向に対し、第三身分は、身分別の審議では結果が見えていることから、合同審議を主張した。紆余曲折の末、6月17日に第三身分だけで国民議会を成立させ、「国民議会は、憲法を制定し、社会の秩序を回復し、王政の真の原則を擁護するために召集され…」という趣旨の宣言を行う。この時点で議員たちはまだ、敵は国王ではなく、側近と背後にいる貴族ら特権階級であると信じていた。しかし、6月23日国王は議会の解散を命じ、議会側がこれを拒否したことから、政府による武力鎮圧への怖れが怒りに転じ、7月14日、パリ市民はアンバリッドの武器庫を襲い、弾丸の不足を補うべくバスティーユ城塞の襲撃へと走るのである。ここにいたって王が譲歩し、パリ市役所を訪れて市民と和解する。国民衛兵司令官に任命されたラファイエット(1757~1834)は、帽章にパリ市の色である赤と青の間にブルボン王家の白をはさんだ三色旗を採用し、これがのちにフランス国旗のデザインになるのである。

危険を感じた貴族たちが国王を見捨てて亡命したあと、民衆は「国王万歳!」と叫び、なお国王のもとでの新体制を望んでいた。91年には憲法が制定されて立憲王政で収まるかに見えたのだが、諸勢力が入り乱れ、国王側の対応のまずさもあって、いっきに王制の廃止から王の処刑(1793年1月)にまで突き進んでしまう。

**人権宣言** 7月14日の市民と農民の蜂起は、第三身分の代表であるブルジョアジーにも不安を与えた。そこで開明的な自由主義的貴族とブルジョアジーの妥協によって、急きよ旧体制の改革が決められる。8月4日の夜、憲法制定会議は免税特権をはじめとする身分的特権と地方的諸特権を廃止し、領主制については、一部無償、他は有償で廃止することを決議した。この決議はその後まもなく正式の法令になった。これにより租税負担の平等と身分制度の廃止が決まり、官職の売買や教会の十分の一税も廃止された。しかし、領主制については、領主裁判権などの領主の人的諸権利は無償で廃止されたが、物的権利（土地に対する諸権利）は領主の所有権と見做され、年貢の20年分などという高額補償を支払わなければ廃止されないこととされた。これでは肝心の領主制の根幹に改善が見られず、大多数を占める農民に大きな不満が残った。

8月4日の決議によって、改革派は単に政治機構の改正にとどまらず、旧体制の社会構造全体を大きく変革する方向を決めた。そこで8月26日、それまでに達成された革命の成果を要約し、革命の諸原理を明示するために、議会は「人権および市民権の宣言」（通称人権宣言）を採択した。「人権宣言」は、それまでカトリック教会が支配してきた精神原理を排し、市民社会の原理の確立を目指すものであった。このような宣言が革命初期の時点で登場したのは、1776年のアメリカ独立宣言の影響があった。アメリカ独立宣言は、単に本国からの政治的独立を宣言するだけでなく、なにゆえに独立を宣言するかの理由を明記して正当性をアピールしていたからであった。1789年8月26日の「人権宣言」は17条からなり、例えば革命の諸原理を次のように表現している。

第1条 人間は生まれながらにして自由であり、権利において平等である。

第2条 およそ政治的結合というものの目的は、人間の自然に備わった諸権利を保全することである。その諸権利とは自由、所有、安全、および圧政に対する抵抗である。

第3条 およそ主権というものの根源は、本質的に国民の内に存する。

第6条 法律は一般意志の表現である。すべての市民は、その身みずから、またはその代表者を通じて、法律の作成に参画する権利を有する。……すべての市民は法律の前に平等である。

第10条 何人もその意見の表明が法律によって定められた公の秩序を乱すものでない限りは、その意見のゆえに、たとえそれが宗教上の意見であろうとも、他から脅かされることがあってはならない。（ビジュアル版「ヨーロッパの革命」p171）

国王は8月4日の決議や人権宣言の裁可をすぐには行わなかったが、10月に再び民衆が蜂起してヴェルサイユに押しかけ、国王と議会をパリに移転させたため、やむなく8月の諸決定を裁可した。人権宣言自体は革命の理念と方向性を示しただけであったから、議会は1789年末からそれらをどう具体化していくかを検討した。次々に新生フランスの諸制度や諸政策を決定し、それらを総括して91年9月、七編210条からなるフランス最初の憲法（91年憲法）を制定した。「人権宣言」は人間の自由、権利の平等、国民主権などの

普遍的な価値を宣言し、経済活動の自由を標榜する根本的な政治原則であり、憲法の本編の規定に優先するものとして「前文」とされたのであった。

人権宣言は近代市民社会の成立を示すものである。この宣言がフランス人だけに関わるものではなく、人類普遍の原理として提示されたことは、ヨーロッパ史、ひいては世界史における「近代への道」を示すものとなった。

**追いつめられる国王** 民衆の蜂起によって国王が譲歩し、「91年憲法」が制定された。この時点でも、国民は貴族・高級聖職者階級を特権階級として敵視したが、国王に対しては階級を超越した敬意が払われていた。だが、革命に賛同した少数の自由主義貴族とブルジョアジーが先導した91年憲法による立憲王政は、一方で反革命勢力、他方で民衆や農民の不满という左右からの攻撃に晒されていた。革命幹部らが国王の信望を回復する手段を講じようとしていた矢先の6月20日、国王のパリ脱出事件が起こり、すべては水泡に帰してしまう。

1789年10月の民衆蜂起でヴェルサイユからパリのチュイルリー宮に移されて以来、国王はパリを脱出して政権を回復する計画をたてさせていたが、内戦を引き起こすことを恐れて実行をためらっていた。王に脱出を決意させたのは、第一に、91年4月2日のミラボールの死であった。ミラボールは王の絶対権を制限するために自由と国民議会のために働いてきたが、一方で革命側と君主制の間の妥協の道を模索していた。調停者である彼の死が王の希望を打ち砕いてしまった。第二は、4月18日の復活祭前の日曜日の事件である。ルイ16世は強制されて署名した91年憲法に係わる諸項目の中で、とくに「聖職者民事基本法」に抵抗を感じ、後悔していた。同法により、教会財産を没収して国民の財産とし、十分の1税を廃止し、修道院を廃止し、聖職禄は年金に切り替えることとなった。それだけで大改革だが、聖職者を公務員とするために、その選任は議員などと同じく選挙法に定める有権者によって、(教皇とは無関係に)選出されることとなった。しかも、聖職者になるにはこの基本法への忠誠を誓うことが義務づけられた。これでは教皇とカトリック教会への絶縁宣言に等しい。「人権宣言」を非キリスト教的と非難していた教皇は、91年3月から4月にかけて、二度にわたって「聖職者民事基本法」への非難声明を公にしていた。

こうした背景のもとに、91年の復活祭前の日曜日のミサにおいて、ルイ16世は基本法への忠誠を誓約した枢機卿から聖体拝領を受けることを拒否し、これが物議を醸した。翌4月18日、国王と家族が前年同様復活祭の週を近郊のサンクルー城(ルイ16世がマリー・アントワネットのために購入)で過ごすべく、馬車でチュイルリー宮を出たところを民衆に遮られるという事件が起こった。王の行動を知った民衆が自発的にカールセル門広場に集まり、王の馬車を取り囲んでしまったのである。パリ市の第二軍団もこれに加わり、事態を知ったラファイエットらが駆け付けたものの、王のために道を開くことができず、王一家は2時間も立ち往生したうえで、徒歩で宮殿に戻らなければならなかった。

これらが相まって、6月20日の国王一家の深夜のパリ脱出行となったのであった。

**国王のパリ脱出** 行き先はシャロン・アン・シャンパーニュ経由東部国境のモンメディであった。ここで王党派の軍を結集して政権奪回を狙おうというのである。失敗した場合に限り、外国の支援を仰ぐ手はずになっていた。この時期国王一家はチュイルリー宮に囚われの身同然であり、革命派は王のパリ脱出に警戒を怠っていなかった。

それゆえ、脱出行は概要次のように行われた。側近のフェルセン伯爵の手配によって、以前からロシアのゴルフ男爵夫人の名義で馬車を発注しており、同夫人の一行として国王および同行する各人の旅券が準備されていた。王太子と王女の養育係りのトゥルゼル侯爵夫人がゴルフ男爵夫人になりすまし、ルイ 16 世はゴルフ夫人の執事のデュラン名義、王妃マリー・アントワネットはゴルフ夫人の 2 人の子供の養育係りのデュシェ夫人、王妹エリザベートはゴルフ夫人の友人、王太子と姉の王女はゴルフ夫人の二人の娘（王太子は女子に扮した）を偽装した。

1791 年 6 月 20 日 22 時 50 分、フェルセンが王太子と王女、および養育係りのトゥルゼル夫人をチュイルリー宮殿から連れ出し、馬車に乗せてセーヌ河沿いにルーブル宮を一周してチュイルリー宮殿付近のレシェル通りに戻り、王と王妃が抜け出てくるのを待つ。23 時 30 分、王と王妃はラファイエット將軍らの立ち会いのもとで就寝の儀を終える。形骸化してはいたが、まだこの習慣が残っていたからである。日が変わって 6 月 21 日 0 時 10 分、従僕に変装したルイ 16 世がレシェル通りに待っていたもう 1 台の馬車に乗る。馬車にはすでに王妹エリザベートが乗っており、0 時 35 分にはマリー・アントワネットも加わる。2 台の馬車は東に向かい、1 時 50 分ヴィレット門（現在のロトンド・ド・ヴィレットのあるところ）を無事通過してパリ市の門外に出る。外には長旅に耐えられるよう特別に造らせた王家用の豪華な馬車が待っており、一行はこれに乗り込んでモンメディへ向かった。

一方、朝 7 時に伺候した執事が王とその家族の逃亡に気づく。ベッドには「フランス国民へ告ぐ」と題する全 16 ページの手書きの文書が残されていた。王はこの中で、王に強い権限を残す立憲王政を望む意思を表明していた。文書はただちにラファイエット將軍に渡され、議会で点検した結果公開しないことに決し、王の追跡が始まった。この文書は 92 年 12 月の王の裁判で読み上げられたり、その後も時に引用されて存在は知られていたが、国民に開示されることのないままいつの間にか紛失し、2009 年になってアメリカで自筆原文が発見された。そのいきさつは、例えば、2009 年 5 月 20 日付け「フィガロ」紙に、王の手書きの最終ページの写真付きで詳しく紹介されている。

結局、王の逃避行はいくつもの手違いがあつて予定時刻を大幅に遅れ、王側の軍に出会う前にオーストリア（現ドイツ）国境近くのヴァレンヌで逮捕され、パリに連れ戻されてしまった。ルイ 16 世がパリを脱出するにあたって、自分の意図を国民に説明したいという思いでしたためた上述の文書は、後世「ルイ 16 世の政治的遺言」と呼ばれるようになる。

王の逃亡は国民への裏切りとみなされ、92 年 12 月の裁判で有罪判決を下され、1793 年 1 月 21 日に断頭台に消えたのであった。

**アーサー・ヤングの現地レポート** 「旅」の観点からこの時代の最も貴重な旅行記とされるイギリスの農学者アーサー・ヤング（1741~1820）の「フランス紀行」は、今風にいえば、フランス革命の進行を目の当たりにした知識人の現地報告の観がある。ヤングはサフォーク州の小地主の家に生まれた。農業経営に携わり、様々な農業実験を行ってその結果を発表して注目され、農業研究者としての道を歩む。イングランドとアイルランドをくまなく旅行して農業事情を報告し、1787年から3年続けて3度、フランス各地域の調査旅行に出かけている。日誌風にまとめられたこの紀行は、この時代のイギリスやフランスの旅行の実態を知るのに格好の文献・資料であるが、とくに彼の3度目のフランス旅行が1789年6月2日から1790年1月30日までであったから、まさにフランス革命の混乱のさなかの旅であった。毎日の日誌の中で、彼は第三者の客観的な目、さらにはいえば市民革命の先輩国のイギリスの知識人として、革命の進行をみつめながら日記を綴っている。

彼は出発に当たって、フランスは目下三部会を召集中であり、おそらく新しい政体に転換するであろうと予告し、そうなれば当然農業にも大きな変革が起きるであろうから、時宜を失せずに見ておきたいと書いている。パリには6月7日に到着し、友人のラゾウスキ（リアンクール公の子弟の通訳としてかつてヤングのもとを訪れ、ヤングと意気投合したポーランド系のフランス人）経由で、デスチサック公夫人なる貴族の館に滞在することになる。翌6月8日の日記に「私の仕事は、現に起こっている事態の記録をとることではなく、できるだけ、その日に一番有力であった世論をとらえることにあるから、パリ滞在の間に、コーヒー・ハウスにたむろする街の論客から三部会の指導者まで、あらゆる種類の人々と会うことになるだろう」と書いている。実際にヴェルサイユの三部会の視察に何度も出かけ、革命派のたまり場になっていたパレロワイヤル（当時革命シンパとされたフィリップ・エガリテの宮殿）で政治的パンフレットを集め、いくつものサロンに出入りして議論に耳を傾けるなど、精力的に取材し、そうして集めた情報を毎日書き留めて自身の見解を述べている。

フランス革命の意義や経緯を解説する史書は無数にあるし、当時の人々の証言も沢山あるが、イギリスの知識人がフランス貴族の館に滞在し、政府の要人や様々な党派の人々とも面談しながらの観察記は臨場感に溢れていて面白い。ヤングは革命の向かう方向に同調しながらも、革命派が中核を欠いていること、政府の対応の右往左往ぶりを批判的に描写している。

ヤングは、6月23日の国王の議会解散命令が民衆の圧力で撤回されるのを見届けて、革命は成就したようだとの感想を漏らし、6月27日の項に次のように書いている。「私は次の点に心底よろこびを覚えてパリを発つことになろう。すなわち国民の代表が祖国の政体を改革できるだけの権限を手にして、将来、不可能ではないにしても、少なくとも非常に難しい悪弊を正し、その結果、あらゆる効用上の点からみて、まぎれもない政治上の自由を確立し、首尾よくそれをやってのけるなら、同胞に市民的自由という貴重な天恵をも確保してやる多数の機会を手に入れることは間違いない、と」（宮沢洋訳）。

かくて、ヤングは6月28日、革命さなかのパリを去って東部の視察に出かけていく。行く先々でパリの情勢が田舎にほとんど伝えられていないことを嘆くが、問題の7月14日にはメッツにおり、パリの最新情報を得て、自国の革命と重ねて次のような感想を記している。「巧みに運営できれば欲しいものを何でも手に入れることができるだろうに、革命に成功しても、成功自体が自分たちを破滅に追いやりかねない。フランスはイギリスと同じように、その懐にクロムウェルのような人物をいだきかねない」と。

ヤングはパリ滞在中も地方滞在中も、オペラを観劇し、要人に会い、博物館などを訪れている。パリ中が、あるいはフランス中が湧きかえる混乱の中に あるわけではなく、翌1790年1月までフランスに滞在してロンドンに戻っていった。

**対仏同盟と国民軍の創出** 当時のフランス人は、革命をやり遂げ、世界史の先頭に立ったという強い誇りをもっていた。そして、その正しい革命を、いまだ王政のくびきの下にある諸外国に波及させて人民を解放しようとの議論が活発であった。フランスの亡命貴族や外国の王政はこの風潮に危機感を覚えて反革命に動き、革命政府の打倒を目指すなど、フランスにとって危険な時期を迎えていた。戦争にならぬよう懸命に抑えようとするロベスピエールの努力は実らず、1992年2月、オーストリアとプロイセンによる反革命のための第一次対仏同盟が結成され、4月、ルイ16世が立法議会においてオーストリアへの宣戦布告を提案し、議会は満場総立ちで可決し、戦争が始まった（～97年）。

結局、立憲王政崩壊の直接の原因は戦争の開始であった。フランスの亡命貴族と革命の自国への波及を恐れるオーストリアとプロイセンは、国境周辺に軍隊を終結させ、武力干渉による反革命の意図を露わに示した。オーストリアについてプロイセンも参戦する。フランスは緒戦で敗北し、「祖国は危機にあり、武器をとれ！」という非常事態宣言が発せられると、全国から義勇兵が続々とパリに集まり始めた。集合地のシャン・ド・マルスに最後に現れたマルセイユの義勇兵たちは、ルージェ・ド・リール工兵大尉がストラズブルで作詞作曲した「ライン川の戦歌」を高唱しながらパリに到着したので、その歌は「ラ・マルセイエーズ」と呼ばれ、のちにフランス国歌となった。

絶対王政の時代まで、国の支配権の継承は王の血縁や婚姻によることが多かったのですが、正当な継承者がいない場合、王位継承を争う王家同士の継承戦役が頻繁に戦われた。それらの戦争は少数の軍隊と、短期間賦役で駆り出される農民のほか、傭兵を頼んでの戦争であった。しかし、フランス革命戦争は、国を守るために「国民」が立ち上がり、初めて一般市民や農民を含む国民の戦争（近代戦争）として戦われた。かくして、フランス革命戦争からナポレオン戦争を通じて、大陸初の近代的国民国家が成立するのである。

## ナポレオン登場

周辺諸国との打ち続く戦争の中で頭角を現したのがナポレオン・ボナパルト（1769～1821）である。ナポレオンはコルシカ島の貴族の家に生まれ、フランスで教育を受け、1785年にパリ陸軍士官学校（砲兵科）を卒業した。1793年に国民公会軍の砲兵隊の指揮官に任命さ



れ、反革命軍の手中にあったツーロン港を奪還して一躍名を上げる。ツーロン要塞の攻防は、ナポレオンの献策を入れずに堅固な要塞に無謀な攻撃を繰り返して兵を損耗した司令官のカルトー将軍が解任されたあと、ナポレオンの豪雨をつく奇襲攻撃で要塞を陥落させることができた。旅順 203 高地攻防を思わせる事例である。この功績でナポレオンは 24 歳の若さで少佐から旅団長（准将）に昇格し、革命政府軍の若き英雄として登場した。

翌 94 年にイタリア方面の砲兵司令官になったが、94 年のテルミドールの反動クーデタでロベスピエールが失脚し処刑されると、ロベスピエールの弟オーギュスタンと親しかったナポレオンも逮捕され、一時は投獄という憂き目を見る。しかし、95 年 10 月 5 日、王党派のヴァンデミエールの反乱でチュイルリー宮殿の国民公会が攻撃された際、テルミドールの首謀者の一人で総裁政府の指導者であったポール・バラスが鎮圧軍の司令官に任命されると、ツーロンでのナポレオンの活躍を知っていたバラスは副官にナポレオンを起用した。指揮を任されたナポレオンは、市街地の真ん中で、民衆に被害を及ぼす危険を押しつけて大砲による砲撃を敢行し、1 日で暴動を鎮圧してしまった。これで名声と中央の信任を獲得したナポレオンは、96 年にイタリア方面軍の司令官に任命される。彼はわずかな兵を率いて北イタリアに進軍して連戦連勝し、97 年 4 月には長駆ウィーンに迫る勢いを見せた。10 月には、敗勢のオーストリアとの間にカンポ・フェルミオの和約を結び、オーストリア領ネーデルランド（今日のベルギー）を割譲させ、同年 12 月パリに凱旋して熱狂的な歓迎を受けた。この勝利によって、第一次対仏同盟は瓦解したのであった。

**エジプト遠征** 次の相手はイギリスである。陸戦では連戦連勝だったが、海を隔てたイギリスには決定的な打撃を与えることができなかった。98 年 7 月、イギリスとその植民地インドとの連携を断つことを主たる目的として、オスマン・トルコ帝国支配下のエジプトに遠征する。7 月 3 日にナイル河口のアブキール湾に上陸してアレクサンドリアを制圧し、21 日にはピラミッドで有名なギザまで 15 km の地点でマムルーク軍を撃破し、25 日には早くもカイロに入城した。上陸からわずか 3 週間後のことであった。しかし、その 10 日後、フランス軍の動きを警戒して追ってきた英軍がナイル河口に到達して海戦となり、フランス艦隊はネルソン率いる英海軍に壊滅的な敗北を蒙った。ナポレオン軍はエジプトに孤立して動けず、さらに 12 月には英国の主導で第二次対仏同盟が結成され、本国にも危険が迫ってきた。これを知ったナポレオンは、99 年秋、側近だけを連れてパリに戻り、総裁政府に失望していた民衆の大歓迎を受ける。ナポレオンは総裁のひとりシェイエスと組んでブリュメールのクーデタを起こし、ナポレオンの軍事独裁が実現した。

これによってフランス革命は終わりを告げる。フランス革命は身分制や領主制を基礎とする旧体制を一掃し、資本主義に適合する社会体制を生み出し、ある程度は貧しい人々の生存権を保障しようとする社会政策にも手を付けた。革命は終わったが、この後ナポレオンはフランス革命の成果を正当に継承し、それをヨーロッパに広める役割を果たすべく奮闘することになる。

**ロゼッタ・ストーン** ここで是非取り上げておきたいのは、ナポレオンのエジプト遠征の学術的貢献である。彼は様々な分野の学者・技術者からなる 167 人の学術調査団を同行させ、エジプトの地理や地勢の調査のほかに、考古学的調査も行わせている。このときフランス軍の大尉ピエール＝フランソワ・ブシャールが発見したロゼッタ・ストーンは、石版による模写や金属版に象り直され、考古学資料としてヨーロッパの多くの博物館にもたらされた。その碑文からジャン＝フランソワ・シャンポリオン（1790~1832）が古代エジプト文字を解読してエジプト学が始まったことはよく知られている。

ただし、ロゼッタ・ストーンの本物は、1801 年にエジプトに上陸したイギリス軍の勝利によってフランスから英国に譲渡され、ロンドンに持ち帰られて大英博物館を飾ることになった。周知のとおり、現在はエジプト政府がイギリスにこれの返還を請求している

**ナポレオン帝政** ナポレオンは革命の申し子であった。自由と平等というフランス革命の精神をヨーロッパに広めるためには、各国の王政を打倒しなければ実現できない。そのためには軍司令官ではなく、従属国の上に立つ「皇帝」でなければならなかった。彼は短期間のうちにヨーロッパ連邦をつくるのにほとんど成功した。残るはイギリスであった。大陸封鎖によってイギリスを孤立させ、イギリスを崩壊させることによって理想は実現する、と彼は考えた。しかし、海洋通商国家として成長し、国内経済も豊かになっていたイギリスは崩壊しなかった。大陸封鎖はかえって大陸諸国の経済を支える力のないフランスに負担が大きく、崩壊したのはフランスの方だった。とりわけ大量の穀物をイギリスに売ることによって国民生活を維持してきたロシアを、農業国フランスは支えることができなかった。ロシアが大陸封鎖から脱落し、ナポレオンはロシアを罰するために遠征軍を率いて戦って失敗した。その後はとどまることなく転落が続き、最終的に 1815 年のワーテルローの戦いで英軍に敗北し、歴史の舞台から消えたのであった。

なお、ナポレオンの偉大な功績の一つに街道建設があるが、これは旅のサービスの項で紹介する。

## 2. イギリスの産業革命

フランスで革命が進行している間に、イギリスでは産業革命が大きく進展していた。ナポレオン戦争はイギリスにとって国外での戦争であったから、国内に戦争の被害はなく、戦争遂行のためにむしろ生産性は向上した。イギリスが産業革命において他国に先行し得た理由のひとつに、支配階層を形成する貴族の性格が大陸と大きく違っていたことが挙げられる。すでに見てきたように、イギリスは、18 世紀半ばには他国に先駆けて経済成長を実現し、いち早く多数の「国際観光客」を大陸諸国に送り出すまでに豊かになっていた。

ナポレオン戦争の間中断していた大陸への観光旅行は、産業革命の成果である旅客鉄道や蒸気船という交通革命によって、近代ツーリズム時代を到来させることになるのだが、まずは、その背景を概観しておこう。

## イギリスの貴族

絶対王政下のフランスの貴族は40万人ほどで、帯剣貴族と法服貴族にわかれていた。帯剣貴族とは十字軍以来の古い家柄の貴族であり、法服貴族は新たに役職を得た者や豊かになったブルジョアが官職を買って貴族に列せられた者などであったが、時を経て同じように特権階級化して旧体制下の支配層を形成していた。彼ら自身は、ヴェルサイユとパリでよく言えば文化的、悪く言えば怠惰で弛緩した生活を送っており、領地の経営は代理人まかせであった。

これに対してイギリスでは、バラ戦争によって中世以来の封建貴族層はほぼ消滅してしまい、ほとんどの貴族はそれ以降に王によって爵位を与えられた新しい階層であった。フランス貴族のような特権をもたず、税も課され、領地に居住して領地の経営に励んでいたのがあった。

**100年戦争からバラ戦争へ** そこで、18世紀半ばにツーリズムを生みだし、産業革命の原動力となったイギリス貴族の特性とはどのようなものであったのかを少し遡って振り返ってみよう。

中世末期、イギリスはフランスと100年戦争(1337~1453)を戦い、一時はイギリスとフランドル同盟軍がフランス王国領の半分近くを占領した時期もあった。この時代の戦争は、封建制の崩れからはみ出した貧しい騎士階級や食い詰めた農民たちが傭兵となり、フランスもイギリスも戦争のたびに小単位(15~30人程度)の傭兵団をかき集めて戦争に従事させていた。戦争は断続的であったが、停戦時も農民にとって同じように危険であった。戦争が中止になると、国王は傭兵隊への給与支払いを停止したから、兵たちは生きていくために容易に暴徒や夜盗の群れと化し、農村をほしいままに略奪した。100年戦争の結末は、危機的状況下にあったフランスに奇跡の少女ジャンヌ・ダルクが現れ、形勢逆転してフランスを勝利に導いたことは、歴史上の謎として記憶されている。

100年戦争が終結し、戦争中の各勢力の合従連衡も終わって、両国ともようやく国民意識が誕生する。国境もほぼ固定し、ともに王権の強化に向かうのだが、その行き方は大きく異なっていた。フランスではルイ11世(在位1461~83)以降中央集権化が進み、16世紀のユグノー戦争を経て、ブルボン朝による絶対王制を実現する。負けたイギリスのほうでは政情が落ち着かず、引き上げた軍隊や傭兵たちは失職して収入の道を失った。ランカスター家出身の時の英王ヘンリー6世は精神を病む人で、敗戦後の混乱を処理する能力に欠け、戦争終結2年後にヨーク公が叛旗を翻したことから、ランカスター家とヨーク家の両家を中心に、血みどろの内乱がはじまってしまった。ランカスター家が赤いバラ、ヨーク家が白いバラを紋章としていたため、のちにバラ戦争(1455~85)と呼ばれることになる戦争である。

この戦争にイギリス全土の封建領主が巻き込まれ、肉親同士すら敵味方に分かれ、容赦なく政敵を抹殺し合う凄惨な内戦となった。30年にわたる正視に絶えない戦闘の中で、ヘンリー6世もヨーク家から王位についた幼王エドワード5世も倒れ、新たに王位を奪取した

ヨーク方のリチャード三世も、フランス亡命から帰国してきたランカスター派のヘンリー・チューダーに敗れて殺された。シェイクスピアの「リチャード三世」はこのバラ戦争末期の戦国時代が舞台になっている。

**絶対王政下の諸身分と権力組織** ヘンリー・チューダーがチューダー朝初代のヘンリー七世として王座に就いた時、第1回の議会に出席した旧貴族階級は29名に過ぎなかった。その後40名程度に戻ったが、貴族の顔ぶれは大きく変わってしまった。チューダー朝最後のエリザベス一世（在位1558~1603）の即位当時は、公爵1、侯爵1、伯爵15、子爵2、男爵38で、女王が新たに創設した新貴族は10家に過ぎなかった。これに対し、スチュアート朝のジェームズ一世とチャールズ一世は合わせて92家もの貴族を乱造したが、これらは王によって地位を得たもので、王の忠実な支持者となった。貴族の最下位に位置するのがナイト（騎士）であるが、軍務に従ったのはごく一部で、大部分は地方に定着した地主であり、下級地主のジェントルマンと同列であった。ジェントルマンは紋章を有し、貴族の次・三男がこの称号を用いることもあり、ヨーマン（自営農民）や商人から成り上がる者もあった。騎士・ジェントルマン階級は、中産階級として封建旧貴族とは対抗関係にあり、王の支持層を形成した。

市民の中でジェントルマンに匹敵する存在であったのが商人で、商人とジェントルマンとの間に交流が見られるのはイギリス社会の特色であった。ジェントルマンの次男、三男が富裕な商人の徒弟になることもあり、商人が金を溜めて土地を買い、田舎に引っ込んでジェントルマンになることも多かったのである。

もう一つのイギリス政治の特徴は、王政と議会の関係である。イギリスでは13世紀に封建的身分制議会が創設されて以来、廃止されることなく存在を続け、チューダー朝においても度々開催されていた。議会は封建貴族にとっては王の専制を制御する手段であったが、絶対王政のもとでは封建貴族を抑える手段として使われたからである。宗教対立が激しかった17世紀には、国王と議会の対立によって清教徒革命が起こり、名誉革命を経て立憲王政下に安定したことは、グランドツアーの始まりの項で紹介した。

イギリスの貴族は、先述したとおりフランス貴族のような特権は持たず、税も課されていて、それぞれが領地に居住して領地の経営に努めなければならなかった。「フランス紀行」を書いたアーサー・ヤングは「イギリスの貴族は自ら領地に住んで立派にしようと励むのに、フランス貴族は宮廷を追放された時だけいやいやそうする」と両者を対比している。

イギリスでは大貴族が弱く、小貴族が数も多くかつ力を持ち、それだけ国内の経済活動が活発であった。その一つの表れが16世紀半ばに始まった自由農民や小領主による第一次囲い込み運動である。主要輸出産業である毛織物工業の増産のために、ばらばらの土地を統合し、入会地や開放耕地（収穫が終わったあと共有の放牧地として開放される土地）を囲い込んで大量の羊の飼育を行い、イギリス経済の発展を促進した。これらは小規模であり、個人の才覚で行われたものであったが、18世紀には政府主導の第二次囲い込み運動が活発に行われ、土地の集約によって資本主義的生産活動が活発化するののである。

## 産業革命の進展

以上のような歴史的経緯を踏まえて、イギリスで最も早く産業革命が生じた理由を、遅塚忠躬「ヨーロッパの革命」は次のように整理している。第一に、最も早くからプロト工業化の国民経済形成が見られ、その中から問屋制やマニファクチャーの形をとった資本主義的工業が発展した。第二に、いち早く市民革命を経験して、ブルジョアジーの自由な経済活動が保証されるようになっていた（イギリスには生産活動を制約するギルドの制度がなかった）。第三に、オランダやフランスを破って海外に進出し、18世紀に世界商業と植民地支配の覇権を握ったため、資本の蓄積が進み、海外市場が急激に拡大された。第四に、農業革命と囲い込みの進展によって工業就業者の食糧が確保され、かつ、農村から流出した人々が工業の必要とする豊富な労働力を提供した。とくに、18世紀の政府主導の第二次囲い込み運動は、旧来の農村共同体を解体し、中小農民の離村と労働者への転化を促進した。

**綿工業の発展** 以上は一般的背景であるが、18世紀の後半に産業革命を必然化する直接的な契機があらわれる。綿製品に対する内外の需要の急速な拡大である。それまでイギリスを含むヨーロッパの繊維産業は毛織物が主体であったが、原料の羊毛の供給には限りがあった。ヨーロッパに自生しない綿花を原料とする綿製品は、18世紀前半まで東インドから輸入される高級舶来製品で、積出港のカリカットをなままってキャラコと呼ばれていた。それが18世紀の後半に西インド諸島、19世紀にはアメリカ合衆国南部のプランテーションから奴隷制生産による安価な原綿がいくらかでも供給されるようになり、綿織物の工業化が急速に進み、産業革命の牽引車となっていく。国内で綿布を生産すれば、内外に無尽蔵の需要が見込まれる状況となっていたのである。

アダム・スミス（1723~90）の「国富論」（諸国民の富）が書かれたのは1776年である。第1章の「分業について」において、国富の源泉である労働力の生産力を説明するために、ピンの製造を例に語っていることはよく知られている。いわく、ピン製造の機械や工程について知識のない労働者が一人でピンを作ろうとすれば、1日に1本作るのも難しいが、分業と協業によれば大量に作ることができる。1人は針金を引き延ばし、別の一人はそれを真っ直ぐにし、3人目はそれを切断し、4人目はそれ尖らせ、5人目は頭をつけるために先端を削る…、というように全部で18の工程に分解し、それぞれの作業の一つまたは複数を1人が分担することにより、10人の工員が1日に4万8000本のピン、1人平均では4800本を作ることができる、というわけである。

これは当時の工業の実態に合わせて説明されたもので、すでに動力を水力や人の手に頼るマニファクチャー（工場制手工業）が広く行われていた。1733年のジョン・ケイによる飛び杼の発明に始まり、18世紀後半になると、ハーグリーブズのジェニー紡績機（64年）、アークライトの水力紡績機（69年）、クロンプトンのミュール紡績機（79年）と紡績機の改革が続き、最後に糸を機械で綿布に織るカートライトの力織機（84~89年）が登場した。残るは動力の機械化であった。

蒸気の圧力を動力に転換する蒸気機関には多少前史があるが、実用に成功したのはトマス・ニューコメン（1663~1729）で、1705年に鉱山の湧水を汲みあげる揚水機の開発に成功した。グラスゴー大学で器具製作者として働いていたジェームズ・ワット（1736~1819）が、ニューコメンの揚水機の模型の修理を依頼され、これをきっかけに蒸気機関の改良に取り組み、1769年に改良型を制作した。ついで、1781年にピストン往復だけだった蒸気機関を回転式にし、この改良によって初めて綿布の生産工場に導入された（1785年）。蒸気機関の工場への導入はまたたく間に広がり、生産力が一気に増大した。産業革命の始まりである。

**輸送革命：馬から機械へ** 資本主義的生産体制は整ってきたが、問題は輸送であった。産業革命のためには機械製造のための石炭、鉄鉱石その他の需要が激増する。これらは概して大都市から遠い森林地帯に所在するから、常に輸送が問題になった。工業製品の原材料や生産された製品の輸送にも大きな輸送力が必要であったが、内陸の輸送は道路または河川によるしかない。舗装がきちんとされていない道路は、荷車や馬車の通行が増えれば増えるほど傷むのは必然であった。フランスやイタリア、スペインにまで調査旅行の足を伸ばしたアーサー・ヤングは、先進工業地帯のランカシャーの道路交通についてこんな風に言っている。「私の知っている限りの言葉を探したところで、この地獄の道を記すに十分な表現を知らない。主要道路というからには、少なくともかなりの道路だと推定するわけである。たまたまこの恐るべき地方を旅行しようとするあらゆる旅行者に、悪魔を避ける時のようにそれを避けた方がよいとまじめに忠告したい。というのは、まずもって倒れるか落ちるかして首か脚をくじくのは間違いからである。旅行者はここで轍に行き当たるが、私が実際に測ったところでは、その深さは4フィートもあり、雨の多い夏から泥であふれている。」

産業革命の進展にとって、道路の改良と蒸気機関の郵送手段への導入が急務であった。蒸気のを人力や畜力の代わりに使う発想やそのための試みはかなり早くからあった。アダム・スミスの計算によれば、馬1頭を養うためには、8人の労働者が消費するのと同量の食糧が必要であり、英国で輸送のために養われている100万頭の馬が機械化によって不要になれば、800万人分の食料が浮く…。産業革命の進展とともに輸送需要は増えるのに、馬の増産はそう簡単ではない上に、ナポレオン戦争のために優先的に馬を軍馬として動員したから、馬に頼ってきた輸送機関は深刻な打撃を蒙った。馬に替わるけん引車の開発は待ったなしであった。蒸気機関の輸送手段への応用としては、蒸気自動車あり、蒸気船あり、軌道上を走らせる鉄道あり、ということで、様々な試みがなされてきた。結果として蒸気船と鉄道が誕生し、将来の郵送の基幹をなすことになるのだが、これらについては、道路と併せて次章の「旅行サービス」の交通・輸送の項で扱い、まとめて紹介することにする。